

## 雲英末雄著 『元禄京都俳壇研究』

井上 敏幸

著者にはすでに京都の諸俳人に関する著作『貞門談林諸家句集』（昭和四十六年笠間書院）『元禄京都諸家句集』（昭和五十八年勉誠社）があつて、本書は、長年にわたるそうした基礎的研究の結果としてまとめられたものであり、著者の視点は、元禄時代前後の京都俳壇における諸事象を、ほぼ網羅的に扱ったものであつて、容易に他者の追隨を許さないものである。本書の独自性は、著者の徹底した俳書搜索、俳書出版の諸事象の解明、また俳諧書肆の研究等々についての全面的な把握が根本に据えられている点にある。こうした研究姿勢に裏付けされた本書は、いわば玄人向きの本格的な味わいをただよわせた研究書といふべきであらう。

まず、本書の構成を「目次」によって示せば次のごとくである。

## 口絵 序文（大谷篤蔵）

論文篇 元禄京都俳壇の構成——『諧京羽二重』の検討を通して——  
元禄俳壇と芭蕉 富尾以船の俳風 三上和及寛書 俳諧隠者三井秋風 前句付の作者たち 俳諧書肆の誕生——初代井筒屋庄兵衛を中心に——『猿蓑』について 元禄俳人の旅——轍士の旅を中心

として——元禄京都俳壇と地方俳人 ○蛇之介常矩について 釈教俳諧・釈教句に関する一考察——自悦・常矩・似船を中心に——『安楽音』の俳諧史的位置——俳諧の漢詩文調を考える——詩から散文へ——西鶴の変貌——

## 資料篇

元禄京都俳壇史年表 『貞享五年歳旦集』（井筒屋編・貞享五年）  
『諧せみの小川』（晩翠編・元禄二年）『俳諧ひこばえ』（和及編・元禄四年）『諧小松原』（只丸編・元禄四年）『俳諧白眼』（轍士編・元禄五年）『諧増補番匠重』（和及編・元禄四年）○『元禄京都諸家句集』補訂 索引 あとがき

論文篇に収められた十四篇は、「あとがき」によれば、昭和四十二年より五十九年の間に書かれたものであることがわかるが、これらの論文が、ほぼ第一篇の「元禄京都俳壇の構成——『諧京羽二重』の検討を通して——」の視点の下に書き継がれていたことに驚かされる。このことは恐らく著者の俳書探索に対する姿勢が、如何に徹底した本ものであったかを改めて証明していたといつてよいであらう。第一篇に示された元禄京都俳壇に対する著者の視点は、副題が示すとおり、元禄四年九月刊『諧京羽二重』巻一・二の「京都俳人名簿」にランクされる人々の徹底調査を通じて、そのランク付けの意味を解きほぐすことであつた。著者は、各ランクの人々について、「点者」とは「点料だけで生活するプロの俳人」であり、その六十八名は、貞徳直門・元禄俳人・新点者に分かれる、「諧諧師」三百五十六名は、「俳諧にうちこんでそれほどの年が入っていないためまだ点者になれぬ俳人か、あるいは

は遊俳のごとく職業を他に持っていて俳諧を余技にしている者」、「作者」二百九十五名とは、「一般俳諧愛好家の人々をさす」とし、「俳諧隠者」については、「隠棲して俳諧に専念するか、あるいは主要な俳諧活動を終えて隠棲している俳人」（ただし、十四名の内大部分が後者に属する）とし、さらに「俳諧清書元」五名について、これは恐らく雑俳の「集所・清書元・会所・執筆元」にあたるものであらうと推測し、最後に「俳諧三物所」を、「歳旦三つ物を刊行する所」、即、井筒屋庄兵衛であると説明している。まことに簡明な叙述であるが、それは、その各々の裏付けが、第二篇以下の論文において詳細に尽されているからにほかならない。こうした元禄京都俳壇への視点の中で、特に著者独自の方法によって、見事に解明された点は次の三点であらう。第一は、いわゆる点者六十八名が、「貞徳直門・元禄俳人・新点者」にわかれることであり、第二は、「清書元」の俳壇における位置、そして第三は「俳諧三物所」井筒屋庄兵衛の果たした役割についてである。第一点について見てみると、貞徳の直門道柯・梅盛、また他の貞恕・随流、談林の高政については、従来通りの位置付けでよいわけであるが、これまで談林に分類されていた言水・信徳・似船らは、「むしろ活躍するのは元禄期であり」、元禄期京都俳壇の中心をなした人々と称すべきだとする主張は、まさに著者の言う通りであって、「蕉風俳人ばかりを採り上げ」るやり方は、片手落ちだったといえる。さらに著者は、「貞門談林の洗礼を経ないで、あるいは経てもほとんどその影響を受けずに元禄期に活躍しただす点者たち、常牧・我黒・晩山・幸佐・好春といった人々」に注目

し、この者達を「新点者」と考えることでもって、京都元禄俳壇の構成を見事に図式化してみせている。また、この「新点者」達の活躍の中に、「前句付俳諧の点者として」のそれが特徴的であることを指摘し、具体的に、第六篇「前句付の作者たち」において、現存するこの期の前句付資料を検討し、似船・和及・我黒・可休・林鴻らの活躍ぶりを分析するとともに、「膨大な前句付作者」たちが、広く地方に行きわたっていたことに注目し、京都俳壇が、そうした地方との関係の中で存立していることを、「新点者」に分類される幸佐・晩山関係撰集の特徴として示している。第二の「清書元」の俳壇における位置が問題となるのも、こうした「新点者」たちの動向があったからである。第三の「俳諧三物所」井筒屋の俳諧書肆としての活躍も、この「清書元」のあり方、また地方との関係を抜きにしては考えられない問題だったのである。筆者は、本書の中で最も重要な論文は、第七篇「俳諧書肆の誕生―初代井筒屋庄兵衛を中心に―」であるといつてよいと思う。著者は、俳諧書肆井筒屋について、

井筒屋の出版書肆としてのものは、あくまで三つ物所としての性格であった。したがって三つ物所としての広く一派にとらわれぬ公平な性格を示して、初期には貞門の人々の俳書を出版し、延宝期には談林派のものもあわせ、さらに貞享・元禄期には蕉門俳書の出版に主力をそそぎ、なおかつ都鄙の撰集を引き受けて刊行し、それは雑俳書にまで及んでいる。しかも他の俳諧書肆が俳書以外のものに手を出したのに対し、井筒屋はほとんど俳書の出版のみに専心している。こうして井筒屋は、元禄

期においてひとり俳諧書肆としての地位を不動のものとしたのである。井筒屋の出現をもって、真の俳諧書肆の誕生と称してよからう。

と結論づけている。この「井筒屋の俳壇の動向に敏感な」姿勢が、そのまま京都における俳諧の動きであり、かつ京都俳壇の基盤をなしていたということが完全に証明されているからである。

いま一つ筆者が注目したのは、第九篇「元禄俳人の旅——武士の旅を中心として——」および第十篇「元禄京都俳壇と地方俳人」の両篇において、京都の点者達と地方俳人との関係が、京都、地方各々の立場から具体的に論じられていることである。前者では室賀徹士の元禄五年六月刊「俳諧白眼 わだち第二」を通して、徹士の旅の実態が明らかにされている。この頃中央の点者たちと地方俳人の間には、それぞれ一定の遊覧コースが定められていたようであり（徹士の場合三河鳳来寺）、徹士の旅は、結局、地方俳人に対する俳諧指導、前句付の募集を通して収入を得、同時に自己の勢力の拡大をはかるものだったと論じている。後者においては、尾花沢の清風・岡山の晩翠・柏崎の郁翁の三名をとりあげ、それぞれの京都俳壇とのかかわり方を具体的かつ綿密に分析することによって、元禄京都俳壇、またそれぞれの地方の特性を見事に描き出している。今後の研究への一つの指針となりえているといってよいであらう。

『諸京羽二重』の分類の一つ「俳諧隠者」の代表として、第五篇において「俳諧隠者三井秋風」がとりあげられている。秋風については、野村貴次氏の労作もあって研究は詳細なものとなって

来ているが、著者は俳書の徹底調査を中心に、その俳風・隠逸趣味を解明しようとしている。著者が力を注いでいる部分は、黄檗への傾倒と隠逸趣味としての花林園での生活についてである。黄檗詩僧や当時の詩壇との交遊の事実を踏まえ、秋風の漢詩文調の斬新さを説き、また花林園の生活を「黄檗の禅法に心をよせ、花林園の四季のうつろいに身を浄める風騷隠逸」のそれであったと述べている。だが現実には、浮世草子に描かれている如く、太夫左門との愛の生活の場でもあり、「俳諧隠逸」から逸脱した享楽的な性格が強かったとし、そうした秋風を「きわめて風流な隠逸者」であったと結論している。確かに秋風は、隠逸者の代表だったといえる。しかし、黄檗・花林園・隠逸、太夫左門、即ち隠逸者という説き方は、やや表面的に過ぎよう。考えるべきは、『諸京羽二重』において、なぜ「俳諧隠者」の分類項目が成立したか、隠逸性と遊興性とをあわせ持つ隠逸者の出現は、時代思想・文学思潮のいかなる流れの上に出てきたものであったか、等々の問いをもって、論じらるべき問題だったのではあるまいか。

俳書蒐集に情熱を持つ著者に、天も味方したのであろう、季吟自筆の「花林園記」後半部を入手され、口絵に掲げて頂いたことを有難いと思う。しかし「元禄京都俳壇史年表」貞享末年の項「季吟、鳴滝の三井秋風の山荘を訪問し、「花林園記」を書く」は、入手以前の記事であり、訂正がほしかった。恐らく出版事情であるうが、他にも、150/9出版活動が活動が、158/15俳人(人)、194/15浪花(化)、<sup>347</sup>11二句不(付)などの誤植が、やや気になった。

(昭60・3 勉誠社 A5判 五七六頁 一三、〇〇〇円)